

北朝鮮軍事ニュース：水爆実験後の北朝鮮

漢和防務評論 20171209(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

今後の北朝鮮情勢について、漢和防務評論の記事を紹介します。
漢和は、北朝鮮の ICBM 完成、核弾頭搭載は時間の問題であり、誰にも止められない、としています。
頼りにされている中国は、共産党幹部の家族が経済制裁をチャンスとして密貿易で儲けている、と暴露しています。
漢和は、中露が完全な石油禁輸を行えば北朝鮮の息の根を止められるが中国は北朝鮮のやぶれかぶれの共倒れ戦略を恐れ、北朝鮮を完全に見放すことは不可能だと指摘しています。
ロシアも対米戦略上、北朝鮮を見放すはずがありません。落とすどころをどうするか、今後数年で朝鮮半島の外交は激変する、と KDR は見えています。

平可夫

KDR は、北朝鮮が水爆技術を有していることを疑っていない。しかもこの 9 月に ICBM に小型の水爆を搭載する実験を行った。北朝鮮が KWASONG (火星) 14 型 ICBM の試射を行って以来、北朝鮮の核兵器、弾道ミサイル技術に対する見方を変える必要がでてきた。中国の ICBM 技術、MIRV 技術に対する見方も同様に変わる必要がある。現在の状況は、ソ連崩壊の一連の副作用が真に露見し始めたと見るべきである。そして少なくとも肯定できることは：北朝鮮の上述の武器技術の発展は、旧ソ連圏の某国人材の支援を受けたことが確実であることだ。またパキスタンの核開発も同様である。

核材料は、弾頭の耐熱材料を含めて、中国から密輸入したか、或いは中国を通じて密輸入した可能性がある。全く効果がないにもかかわらず、北朝鮮に” 経済制裁 ” する意味はあるだろうか？

日没になると中朝国境を通過する人々がいるのは公然の秘密である：国連の制裁が厳しくなればなるほど、中国商人（多くは政府に関係している商人だが）は大いに喜んでいる。大量の密貿易車両が夜間北朝鮮に入っている。彼らの動きは、中国政府が黙認している。

米国の情報関係者は、名指しした上 KDR に対し次のように述べた：中共政治局委員の家族が介入し、北朝鮮の弾道ミサイル、発射車の開発、核材料の密貿易を支援している、と。

KDR はこれ以上の暴露は控える。

米国及びスウェーデンの関連機構は、北朝鮮の 9 月の核爆発についてデータ分析を行った。その結果おおよそ TNT 換算 12 万トンに相当する規模であり、広島原爆の約 5 乃至 6 倍であった。核試験場では、数時間後 2 次的な陥没が発生した。前日、北朝鮮官方テレビは、金正恩が水素爆弾の模型を視察する映像を公開した。KDR の専門家は、次のように判断した：この模型は技術的に見て常識に適っている。2 個の入れ物で構成され、1 番目の入れ物で原子爆弾の核分裂を発生させたのち次に核融合を起こさせる。これは強化型原爆の構造とは異なる。過去 5 年間に北朝鮮が公開した核兵器、ICBM、弾頭試験の写真を見ると、たとえ虚勢や戦略的威嚇の部分があったとしても、現在基本的に確認できることは：彼らが報道するような各種テストは確かにっており、逐次成功していることだ。

北朝鮮は、中国から核材料を入手し、パキスタンやウクライナの専門家による実質的な技術支援を受けているので、水素爆弾や ICBM を開発できるのは不思議ではない。指摘すべきことは次のとおり：12 万トン級の水素爆弾の試験は、北朝鮮が相当高度な核弾頭技術を有していることを示している。水素爆弾の開発で弾頭はますます小型化し、爆発換算量は小さくなり、さらに高度な技術が必要になった。北朝鮮はそれを完成した。

冷戦時代、米ソが装備する核弾頭、原子弾頭は通常 10 万トン級であり、大都市 1 個を破壊するに十分な爆発力であった。30 万トン以上の水素爆弾は”打撃弾頭”と称され、主として敵の核サイロ攻撃用であった。

金正恩は一体何をやろうとしているのか？

北朝鮮問題は、普通の頭脳で考えてはダメだ。自分が金正恩ならばどうするか？と考えるべきである。したがって KDR は常に北朝鮮方式を研究してきた。すなわち：自ら金正恩に変身することだった！

まず最初に座禅を少なくとも 30 分間行う。各種雑念を振り払い、一途に自己の進化に集中する。その後、北朝鮮の刊行物の閲覧を開始する。或いは北朝鮮の映画を見て、北朝鮮の音楽を聴く。相当優秀な一流の人材は、自己を北朝鮮に好感を持たせるように変化させてから、金正恩の内心世界に入るよう試みる。

第一、原爆実験、固体・液体中距離弾道ミサイル、続いて水素爆弾、さらに ICBM 発射実験と、金正恩の核武装計画全体は、大国式である。固体と液体ロケットの開発を並進させている。また 2 種類の核弾頭を同時に開発し、最後にミサイル、ロケットを整合させ、米国を攻撃できる能力を具備しようとしている！

金正恩は大国の知恵を試している。彼の賭けはただ一つ：中国は真の経済制裁は敢えて行わないだろうと考えている。特に石油禁輸である。實際上、北朝鮮

の息の根をとめる唯一有効な手段は：石油禁輸である。北朝鮮は必ず崩壊する。しかし北朝鮮は、中国の弱点を完全に握っている：それは核による拉致である！一旦中国が石油禁輸を実施したならば、ロシアの支援を求める。そうならざるを得ない。もしロシア、中国がともに石油を禁輸したならば、平壤は北京と共倒れの道を選ぶ可能性が高い。これがすなわち核による拉致である。中国語では”魚死網破”（共倒れの意）という。

北朝鮮は、この種の威嚇を何度も北京に伝えた。官方の宣伝においても何度も明確に述べている：中朝関係が破滅した場合の厳しい結果を見よ、と。したがって中国は真の石油禁輸ができない。

モスクワはどうか！1990年代の初、中期、KDR 記者はモスクワ国際関係学院、外交学院及び世界経済と国際関係研究所の専門家と、米、朝、韓、露関係を討論した。およそ全ての専門家が非公式の場で次のように明確に述べた：1.ロシアは、朝鮮半島の統一を真に支持する唯一の大国である、と。このほか、たとえば北朝鮮が米国に挑戦したとしても、ロシアにとっては利益になる、と。世界で真に米国を恐れない国家などほとんどない。”北朝鮮は強大な隣国としてのロシアとは友好国であり、ロシアに対しては当然好意を持っている”。したがって金正日や金正恩は、ロシアが米国の経済制裁に加担しないことを知っていた。ロシアは米国に気兼ねする必要は全くない。

平壤が核兵器、ICBM を開発する決心は堅い。米国がカダフィー政権やサダムフセインを打倒した後では、後戻りはできない。労働党は、この2つの事件の後、内部文書により朝鮮社会主義が自力で核戦力を開発をすることの正しさを全党員に訓示した。

水爆実験を成功させたあとの金正恩は、何をやるであろうか？当然 ICBM のテストを継続する。現在 KS-14 は最初に高弾道の試験を行っただけであり、未完成である。たとえば10回のテストまでは行わなくとも、少なくとも1回は正常な弾道飛行試験として全行程の実験が必要である。KS-12 のように最後に慣性誘導システムの信頼性試験を行うことになる。

核実験について、もし北朝鮮の水素爆弾が彼らが公開した映像のように小型化しているのであれば、原子爆弾の弾頭も小型化していることを意味する。したがってすでに ICBM に搭載する技術レベルに達しており、継続して核実験を行う必要がない。ただ一つの例外は、北朝鮮が継続して多弾頭 (MIRV) を開発しようとしている場合である。

したがって次の段階の ICBM は、日本領土を飛び越え、正常な弾道を描き太平洋の目標を狙うテストとなるのは必定である。この記事は9月7日に書いているが、記事を発表した時には、すでにテストが終了している可能性がある。テストは、技術向上のため必要であり、政治的にも必要である。同時に中国と日

本の脅威となる。

中国に対する威嚇：

第5次、6次核実験は、中国で20ヶ国サミットが挙行されている時及びBRICSサミットが行われている時に行われた。誰に見せるためだったのかは、言うまでもない。KS-14型ICBMは射程が7000KMに達し、中国全土をカバーする。

日本に対する威嚇：

主として、いわゆる”集団的自衛権”を主張する自民党外交である。この概念に基づき航空自衛隊のF-2戦闘機は何度も朝鮮半島に飛来したB-1B戦略爆撃機の護衛を行った。平壤は忍耐するであろうか？

したがって8月のKS-12型中距離弾道ミサイルの全行程飛行試験は北海道上空を飛んだ。

金正恩が日本を飛び越える弾道を選択するのは政治的目的がある。偶然ではない。KDRのFace Bookを見ている読者は知っていると思う。我々は、常に図上演習の結果を発表している。中国や北朝鮮の軍事戦略に関するニュースは、雑誌よりもFace Bookの方が速い。

6回目の核実験の数日前に、我々は図上演習を行って、今年北朝鮮が直面する政治、経済、軍事面の客観状況について分析した。結論は次のとおりである：(金正恩役の者)直ちに核実験を行うべきである。第6回、第7回を同時に行うのが望ましい、と。

ここで我々が4月24日に書いた一文「北朝鮮は新たな核実験を行う可能性がある」を再度掲載したい。翌日北朝鮮は水爆実験を行った。関連の分析した文章は、2016年12月号の「漢和」に詳しく掲載している。

歴史は鏡である！1940年、ソ連軍は、白ロシア軍区でドイツ軍の大規模侵攻を想定した演習を行った。”ドイツ軍”(青軍)の司令官役はジューコフであり、赤軍司令官役は：西方方面軍司令パブロフであった。演習は、ジューコフが率いる機械化戦車軍団による電撃戦で開始された。国境地区の小部隊や前方配置の哨所は完全に孤立した。迅速かつ縦深的に侵入されたことにより、パブロフの西方方面軍の大部分が包囲された。

1941年6月22日、現実に独ソ戦が始まった。フォン・ボック元帥が指揮する中央集団軍は、ジューコフが1年前に行った攻撃方式に倣ってパブロフを徹底的に撃滅した。後者は軍事法廷に送られ、別れる前にジューコフと論争した。彼は、責任を当時の総参謀長ジューコフに押し付けようとした。ジューコフは彼に忠告した：”去年の演習で、私はどのように進攻したか？”

パブロフ：ドイツ参謀部の作成した攻撃計画と貴方の想像した攻撃計画が完全

に同じとは誰が考えるだろう？

戦争中、ジューコフは、スターリンに情勢を報告する際に、いつも言っていた：ドイツ軍の次の攻撃計画は、こうなるはずである、と。スターリンの秘書は極めて不快に思っテジューコフに告げた：“貴方はドイツ総参謀部の計画をどうして知ったのか？”と。ジューコフ：“私は当然ドイツ総参謀部の計画は知らない。私が知っているのは、もし私がドイツ軍総参謀部だったら、こうするだろう、ということだ”と。

したがって北朝鮮総参謀部の次の段階の意図を研究するためには、第一に自分が金正恩に進化することである。そうでないと北朝鮮の行為を理解し、阻止することはできない。

次の段階で、北朝鮮の ICBM のテスト弾道は何を選ぶか？

地縁要素に基づけば、北朝鮮が全行程 3000KM 以上の弾道ミサイル試験を行うには日本本土或いは離島上空を飛び越えなければならない。どの弾道を選択するか？日本政府の北朝鮮に対する態度で決まる。最悪の弾道は当然東京上空である。最も”友好的な”弾道は離島上空である。KDR の図上演習では、3本の弾道を選択し、すでに Face Book で公表した。

次は、米国の態度である。實際上、ワシントンの選択肢は2つしかない：KDRは何度も分析した。米国は、北朝鮮の ICBM 開発成功と、核弾頭を搭載し直接米国本土を攻撃できるようになることを容認することはできない、と。現在、北朝鮮のこの目標は達成しかかっている。

真に実戦で使用可能な ICBM を開発し、それに水素爆弾を搭載できるようになるには、さらに一定の時間が必要である。おおよそ2年前後であろう。一旦そうなると、米国はどうするか？選択肢は少ない。2つしかない。北朝鮮に対し徹底的な軍事攻撃を行うことは、同盟国であっても、また中露も不同意である。単独で事を起こすことは危険が大きい。

もし軍事攻撃を選択しないならば、最後の1本の道しかない。国交を樹立し、北朝鮮を承認することである。”第2次ニクソンショックの到来”である。この路線を選択するかどうかにかかわらず、朝鮮半島の外交は、近いうちに大転換を迎える、と KDR は考える。しかも数年以内に。

現在、トランプの外交手腕や一連の言論を見るとわかる。トランプは年齢的には金正恩の祖父の代である。金正恩は戦略的主導権を握っている。いつ収めるか？いかに収めるか？完全に金正恩自身にかかっている。

最後は ICBM の全行程試験の技術的問題がある。いかにミサイルの全行程を追跡するのか？いかに模擬弾頭を回収するのか？弾頭を回収しないならば焼損の状況を知ることはできない。

何度も行われた弾道ミサイル試験から見ると、北朝鮮は打ちっぱなしだけのよ

うである！対焼損試験は地上で行って、発射弾道は追跡不要ということか？無線によるデータ収集は最初だけか？そうだとすると、ICBMの全行程試験は、実戦配備のためのテストというよりも、政治的意義の方がはるかに大きいことになる。しかしどう言おうと、現在、北朝鮮は、すでに世界で第6番目の核大国になった。これは争えない事実である。現代の国際政治史上、初めての事象である。地縁戦略家はこれを如何に解釈するか？今後の新しい課題である。KDRは次のように考える：北朝鮮のICBM、核弾頭の総合水準は、インド、パキスタン、イスラエルよりも上である、と。大国は、また見て見ぬふりをするのだろうか？

以上